

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

湘南医療大学 保健医療学部 看護学科
教授 片山 典子
(2023年9月25日作成)

1. 教育の責任

湘南医療大学（以下「本学」という。）は「人を尊び、命を尊び、個を敬愛す」をもって建学の理念としている。

こうした理念を基盤として、「継続的学習力、想像力、そして課題解決能力を育む「幅広い教養教育」と、エビデンスに基づいた専門知識・技術の修得を基盤とした「人権や生命の尊厳を慈しみ、感性を享受するための専門教育」を追求し、責任感と使命感を持って自律的、主体的に実践能力を発展させていける医療従事者の養成」が急務であると考えている。

本資料作成者である片山典子（以下、作成者）は湘南医療大学の理念のもと保健医療学部看護学科の教員として、以下の授業科目を担当している。各授業のシラバスは湘南医療大学WEBポータル上で公開されている。

表 1. 保健医療学部 看護学科 担当科目

科目名	対象学年	前期・後期・通年	必修・選択	単位
精神看護学	2年	後期	必修	1
精神看護学概論	2年 (旧カリキュラム)	前期	必修	1
精神看護方法論Ⅰ	2年 (旧カリキュラム)	後期	必修	1
精神看護方法論Ⅱ	3年 (旧カリキュラム)	前期	必修	2
精神看護学実習	3年 (旧カリキュラム)	後期	必修	2
チーム医療論	4年	後期	必修	1
看護応用ゼミ	4年	前期	必修	1
統合実習	4年 (旧カリキュラム)	前期	必修	2
看護研究Ⅱ	4年	前期	必修	1
看護研究Ⅲ	4年	後期	選択	1
実践看護論Ⅴ (バイオサイコソーシャルアプローチ)	4年 (旧カリキュラム)	前期	選択	1

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

湘南医療大学保健医療学部看護学科のめざす教育は、「広い視野で人間を理解できる教養を備え、専門職業人としての倫理観を育み、科学的根拠に基づいた看護を実践できる基礎的能力および、地域・社会に貢献できる能力を持つ人材の育成」を目的としている。

私は社会の変化とともに国民の医療に向けられるニーズは変化すると考えている。その変化に応じた専門職業人に求められる豊かな教養と臨床に根ざした社会的な責任と倫理観を有している看護師を育成する必要があると考える。特に私が担当している精神看護学が対象とする範囲は、あらゆるライフサイクル、あらゆる状態にある人である。取り扱う内容は心の発達から精神的健康の維持・増進・危機への対処、さらには精神を障害された対象の治療的な看護、再発予防、回復促進、社会生活を営む支援、家族看護までを含む広範囲なものである。そのためには、システム理論に基づいて、生物学的側面、心理的側面、社会的側面が相互に関連しあい、全体として(統合的に)対象を捉えて看護する知識・技術が必要と考える。また看護実践には科学的根拠が必要であり、専門職業人としての倫理観を持ち、地域・社会に貢献する能力を持った看護師を育成したいと考える。

2) 理念をもつに至った背景

前項で述べたように精神看護学の対象とする範囲は、広範囲である。また対象をシステム理論に基づいて、生物学的側面、心理的側面、社会的側面が相互に関連しあい、全体として(統合的に)対象を捉えて看護するバイオサイコソーシャルアプローチが必要と考えている。これは、世界的にこのようなアプローチが必要であると1980年代ごろからいわれ、科学的根拠も十分にある。将来の看護を担う学生には、今求められている看護を教授する必要がある。そのため前項の理念に至った。

3. 教育の方法・戦略

このような理念・目的を実現するために、様々な方法が考えられる。私が実践している方法・戦略を述べたい。

1. 精神看護学を学ぶ学生の特徴をふまえた教授方法

精神看護学を教授する際は、次のような学ぶ上での特徴があると考えられる。

- 1) 精神障害者への偏見、怖さ
- 2) 精神障害者と関わった経験がない、乏しい
- 3) 現象を伝えるにくい

そのため、学内での教育方法には「Theory」「Real」「視覚などの五感を使った教材」「アクティブラーニング」を教授行動に取り入れている。

具体的には下記の内容になる。

表 2. 教授行動

Theory	精神看護学の基盤となる理論家の理論・モデルを教授し、科学的根拠を持ちながら実践できるようにする。
Real	理解しにくい現象をとらえられるように Real な事例やシミュレーションを活用し、教授する。
五感を使った教材	映像、画像、音声等を活用し、イメージできるように教授する。
アクティブラーニング	授業の中でアクティブラーニングを取り入れ、体験しながら学習できるように教授する。

2. 経験型実習教育を主にした実習教育

経験型実習教育とは、学生が主に臨地実習場面での経験を振り返り、「リフレクション的経験」として自らの経験を意味づけていく力をはぐくむことを支援する教授法をいう。経験型実習教育においては、学習者を成人ととらえ、「おとなの学び」と称される成人教育学 (Andragogy) の理論に即している。まさに成人教育である看護基礎教育に適しているといえよう。また経験型実習教育に導くための3要素である「オープンリード」「リフレクションを実施する」「I' メッセージ」を大切に教授している。

3. 学内・学外で得られた情報を教育活動に活用

本学での授業の他に、以下のような活動を通して、学内・学外で得られた情報を教育活動に活かしている。

- 1) 各種委員会 (教務委員会、他)
- 2) 「JAPAN JOURNAL OF NURSING SCIENCE」査読委員
- 3) 「Journal of International Nursing Research」査読委員
- 4) 日本精神保健看護学会 学術連携委員
- 5) 日本アディクション看護学会 理事
- 6) 日本アディクション看護学会学会誌 事務局長
- 7) 第21回日本アディクション看護学会学術集会 企画・実行委員、大会長講演座長
- 8) スーパーバイザリー精神科事例検討会 役員 (広報委員)
- 9) 各種研修・講習会講師 (日本精神保健看護学会主催の講師等)
- 10) 令和2年度科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) 若手研究
「臨界期にある統合失調症を訪問する訪問看護師の自律性を高める教育プログラムの開発」研究代表者
- 11) 令和4年度科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) 基盤研究 C
「若者のインターネット依存傾向におけるメンタルヘルスリテラシー教育プログラ

ムの開発」研究分担者

- 12) 令和5年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究C
「臨界期統合失調症者に対する訪問看護師の家族支援における強化プログラムの開発」研究代表者
- 13) 論文発表「システムティックレビューに基づいた新人看護職のメンタルヘルス支援プログラムの開発」
共著者：片山典子、川本利恵子、渡部李菜、陶山克洋、大胡晴香
令和4年4月 インターナショナルNursing Care Research 第21巻1号P31-40
- 14) 論文発表「高齢者虐待の共依存ケースへの援助の実際—高齢者虐待に対応する援助職へのインタビュー調査から—
共著者：松下年子、片山典子、片山直子
令和4年10月 日本アディクション看護学会誌 第19巻2号P22-39
- 15) 論文発表「思春期における社会的ひきこもり傾向とインターネット依存の関連」
共著者：玉田聡史、片山典子
令和4年10月 日本アディクション看護学会誌 第19巻2号P10-21

4. 学習成果

本学では、学生による授業評価アンケートを実施している。作成者が担当している「精神看護学概論」「精神看護方法論Ⅰ」の2021・2022年度の授業評価を以下に示す。

表3. 授業評価

質問番号	質問項目	精神看護学概論		精神看護方法論Ⅰ	
		2021年平均	2022年平均	2021年平均	2022年平均
2	意欲的に受講したか	4.20	4.67	4.30	4.33
3	内容を理解したか	4.10	4.50	4.20	4.39
4	得るところがあったか	4.20	4.50	4.20	4.37
5	学ぶ意欲は沸いたか	4.10	4.67	4.10	4.24
6	課題を発見し探求力がついたか	4.10	4.33	4.00	4.22
7	教員の熱意は感じられたか	4.30	4.50	4.20	4.59
8	教え方はわかりやすかったか	4.30	4.50	4.10	4.57
9	教員とのコミュニケーションはとれたか	4.20	4.17	3.60	3.92
11	板書、配布物は見やすかったか	4.10	4.33	4.10	4.45
12	教員は勉強環境に配慮したか	4.10	4.17	4.10	4.63
13	(担当教員が指示した内容)	4.00	4.50	4.20	3.73
14	総合的に判断し良い授業だったか	4.30	4.33	4.30	4.33

※以下の質問については授業評価とは異なるため表3にはのせておりません。

質問1：履修動機について

質問10：1週間当たりの平均勉強時間について

「精神看護学概論」の2022年度の評価はほぼ全ての質問において前年度評価を上回っている。特に、質問2「意欲的に受講したか」、質問5「学ぶ意欲は沸いたか」において、学生からの評価が高い。このことから学生が高い学習意欲をもち能動的に授業に参加できていることがわかる。次に、質問3「内容を理解したか」、質問7「教員の熱意は感じられたか」、質問8「教え方はわかりやすかったか」の評価が高くなっており、3教育の方法・戦略で述べたように、精神看護学を学ぶ学生の特徴をふまえた教授方法による授業内容が、学生に興味を抱かせ学びに繋がっていることがわかる。また、海外での自身の研究活動を紹介し、諸外国の精神看護の現状を工夫してして教授した。

「精神看護方法論Ⅰ」の2022年度の評価もほぼ全ての質問において前年度評価を上回っている。特に、質問12「教員は勉強環境に配慮したか」、質問7「教員の熱意は感じられたか」、質問8「教え方はわかりやすかったか」の質問において高評価である。勉強環境においては、講義後に理解度を確認する為の小テストを実施することで、講義内容の理解度を確認することができ、知識の定着という効果が得られたことが高い評価につながったと考える。また、講義後にリアクションペーパーを記載してもらい、そこに書かれた質問・疑問を翌講義の前半に説明し理解の定着や疑問点をそのままにしないように工夫している。実際の看護場面の動画を講義後半に使用して講義内容が具体的にイメージできるような工夫を行ったことなども学生の興味を引き立てる一因になったと考える。

教員とのコミュニケーションの評価については、低い傾向にある。

5. 改善のための努力

4で述べたように、授業評価アンケートで高い評価が得られた取り組みを発展し、比較的低い評価については分析を続け改善策を検討していく。

- ・ 学生と教員とのコミュニケーションについての改善
 - ①演習でない講義であっても学生の理解が深まるような講義中の問いかけ
 - ②アクティブラーニング等をより効果的に活用する
 - ③「学生の発言を促すこと」や「学生自身で考えてもらうこと」ができる講義内容を検討

6. 今後の目標

1) 短期目標

(1) 教育成果の評価方法を検討する。

授業評価アンケートのみならず、学生がどのような学びを行っていたか等を研究的視点で分析する。

(2) 研究活動や学術活動、地域精神医療保健活動に貢献する。

精神看護学に関わる研究活動、学術活動を通し、新たな知見を学生に伝えることで質の高い看護師の養成に繋がるようにする。また地域精神医療保健活動への貢献する姿を見せることも学生が自己研鑽し続けることへの教育に繋がる。

2) 長期目標

- (1) 教育成果を研究的に分析し、学術集会および学会誌等公表する。
- (2) 研究活動を通して得た知見を教育内容に反映する。

【添付資料・参考資料】

シラバス (https://sums.ac.jp/pdf/department/nursing_syllabus.pdf にて公開)

授業評価アンケート